



50周年記念シンボルマーク

Monthly Report

SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.141 / 2018.JAN

(月1回発行)

本学開学50周年記念式典・祝賀会を開催 ～約250名の関係者で祝う～



挨拶を述べる朴澤理事長・学事顧問

本学開学50周年式典が1月24日（水）に仙台市内のホテルを会場に挙行され、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進専門官・多田典史様はじめ、一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会会長・学校法人日本体育大学理事長・松浪健四郎様、日本私立大学協会事務局長・小出秀文様など、約250名の方々にお越しいただきました。

式典で朴澤泰治理事長・学事顧問は「昭和42年に体育学科の単科大学として開学した本学が50年の歳月を経て、体育学部6学科と大学院スポーツ科学研究科を擁し、学部卒業生約14000人、大学院修了生約300人を社会に輩出してこれたことは、関係各位のご支援とご協力の賜物であり、心より感謝を申し上げます」と挨拶しました。

また、式典の中では本学に対して多大な貢献をいただいた方々への表彰なども行われました。

式典に引き続いて行われた祝賀会では、11月1日に開催された国際交流イベント（IFE in SENDAI）の様子が紹介され、本学と国際交流がある11か国18大学1研究機関の迫力ある演技を参列いただいた皆様にご覧いただきました。

なお、当日の司会は仙台89ERSチアの鈴木保之香さん（平成23年体育学科卒）と羽川香苗さん（体育学科2年）の2名が務め、式典及び祝賀会に華を添えてくれました。

記念式典・祝賀会の後には、参加した同窓生と旧・現教職員との懇親会も行われ、開学草創期の思い出などの様々なエピソードが紹介されたほか、次代に向けて進み本学に対する熱い期待が込められたお話などもあり、会は終始賑やかで、開学50周年を祝うにふさわしい雰囲気で行われました。

(次頁に続く)

〈目 次〉

本学開学50周年記念式典・祝賀会を開催 ～約250名の関係者で祝う～	1
・記念式典において功労者として表彰された お二方 ・本学の教育運営に多大な貢献をされた方々 に感謝状を授与	2
・平昌五輪スケルトン競技日本代表宮嶋克幸 選手の壮行会を開催 ・平昌五輪スケルトン競技日本代表3選手の コメント	3
・第14回DANDANDANCE&SPORTSを開催	4
・平成29年度学生相談室・教育改善企画運 営委員会共催 教職員研修会「障害学生への 合理的配慮—山形大学における取り組みの 実際—」を開催	5
・今年度2回目の仙台大学Presents 仙台 89ERSホームゲームを開催 ・吉田洋志新助手がハンドボールアジア選手権 に情報分析スタッフとして帯同	6
・南條充寿教授が柔道ハンガリー代表チーム チーフディレクターに就任 ・「春季海外留学・研修結団式、危機管理研 修会」・「夏季海外留学・研修報告会」を開催	7
・スポーツマネジメント・コース卒業論文全体 発表会を開催 ・「地域とスポーツ～そして、2020に向けて」と 題し阿部学長が講演	8

学生の活躍や、取り組みなどをご
存知でしたら広報室までお寄せく
ださい。

Monthly Reportで紹介する他、
報道機関にも旬な話題を提供して
参ります。

本誌へのご意見・ご質問等があ
りましたら広報室までご一報くだ
さい。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

記念式典において功労者として表彰されたお二方



松井 匡治 様

昭和41年朴沢学園内に設置された大学「創設(準備)委員会」メンバーとして、教員人事や施設、設備整備、文部省等関係機関との打ち合わせなどに東奔西走。また、大学設立後は、大学教員として教鞭をとるとともに仙台大学の創成期の礎を築くために尽力された。



松下 邦雄 様

昭和42年、仙台大学の第1回生として入学。入学と同時に発足した学友会委員長として、部活動の振興発展に尽力。卒業後は、仙台大学第1回卒業生として、同窓会のけん引役となり大学の発展のために尽力された。また、朴沢学園評議員として現在も活躍されている。

本学の教育運営に多大な貢献をされた方々に感謝状を授与

医療法人社団慶成会 青梅慶友病院 様
株式会社 こども体育研究所 様
株式会社 七十七銀行 様
鹿島建設 株式会社 様
鹿島道路 株式会社 様
一般社団法人 仙台大学同窓会 様
仙台大学保護者会 様



平昌五輪スケルトン競技日本代表宮嶋克幸選手の壮行会を開催

2月9日から韓国で開催される平昌五輪男子スケルトンに出場する宮嶋克幸選手（体育学科4年）の壮行会が非公開で2月1日（木）、本学LC棟で行われました。

壮行会で宮嶋選手は「私が今この場に立っているのは応援して下さいの方のおかげです。オリンピックでは自分の持てる力をすべて出し切り、入賞、メダル獲得に向けて頑張りたいと思います」と初のオリンピックに臨む意気込みを力強く語りました。

また、阿部芳吉学長からは「彼の目標はメダル獲得。私たちの力でその目標が達成できるよう応援したいと思います。試合まで準備をしっかりと整え、ベストコンディションでいい滑走ができるよう頑張ってください」と激励の言葉が送られ、会の最後には会場に集まった学生や教職員からエールが送られました。壮行会には宮嶋選手の中学校時代の恩師であり、宮嶋選手がスケルトンを始めるきっかけを与えてくれたという吉川祐一先生も北海道から駆けつけてくださり、いつもとは一味違った壮行会となりました。壮行会の後には宮城県庁を訪れ、山田副知事より激励のお言葉を頂戴しました。

なお、競技が行われる2月15日は、柴田町が主催する「平昌2018五輪スケルトン選手を応援する会」が本学LC棟にて開催されることになっており、ライブ配信される映像を小室希さん（本学研究員）と黒岩俊喜選手（大学院生）が解説を行い、宮嶋選手や本学卒業生の高橋選手を応援することになっています。



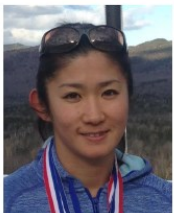
（上）壮行会であいさつを述べる宮嶋選手
（中）北海道から駆けつけてくれた吉川先生
（下左）壮行会後に参加者で記念撮影
（下右）山田副知事から激励金を受け取る宮嶋選手

平昌五輪スケルトン競技 日本代表3選手のコメント

このほど開催される平昌オリンピックのスケルトン競技には本学体育学科4年の宮嶋克幸選手（平成19年3月卒）と小口貴子選手（旧姓：大向、平成19年3月卒）の3選手が選出されました。

3選手から平昌オリンピック出場に向けたコメントをいただいています。

それぞれの活躍を願い、仙台大学の力を結集してエールを送りましょう。

	男子スケルトン 宮嶋 克幸（みやじま・かつゆき） 仙台大学体育学部体育学科 4年 「出場が決まりとてもうれしい気持ちでいっぱいです。出場できるのは色々な方のサポートのおかげなので、感謝の気持ちを忘れずに自分の力をすべて出し切りたいと思います！」
	男子スケルトン 高橋 弘篤（たかはし・ひろあつ） 仙台大学体育学部体育学科 平成19年3月卒 「これまでソチオリンピックの12位を越えて、メダルに絡む活躍をするために4年間競技を続けてきました。もう一度オリンピックの舞台に立てることに感謝をし、最後まで全力でメダルを狙って闘ってきます。」
	女子スケルトン 小口 貴子（おぐち・たかこ） 仙台大学体育学部運動栄養学科 平成19年3月卒 「急に出場が決まり驚きと喜びでいっぱいです。出場するからには応援してくれる方々の為にも全力で戦ってきます。」

第14回DANDANDANCE&SPORTSを開催

皆様の支えがあり、平成30年1月27日（土）に大河原えぞこホールにて、第14回DANDANDANCE&SPORTSを開催することができました。

今回は、自然災害やテロによって私たちの日常が一瞬のうちに破壊され奪われていく現実に対し、私たちがどのように自らの生や安らぎを担保し続けられるかという問いを掲げ、「HOPE～私たちが強くあるために～」をテーマに参加団体に作品創作を依頼致し、全18団体が公演を盛り上げてくれました。

本公演にあたって、ドイツから、ミハエル・シャンドールさんをゲストとしてお迎えし、橋本園子さん、仙台市のバレエ教室パリエ・クラス・ドゥバレエの協力を得て、作品創作を行う機会となりました。ミハエルさんの指導のもと、本学の有志9名とパリエの生徒10名との合同ワークショップを通して、“再生”や“継続”をコンセプトとする作品「プロジェクト1」が作られました。参加者たちは、プロのバレエダンサーと共に作品をつくり上げることで、新たな学びを得たのではないのでしょうか。



実行委員会のメンバー

1部と2部の間では、本公演初の試みとなるダンスバトルを開催しました。ダンスバトルは、ギャングが武力抗争で物事を解決するのではなく、平和的に解決する手段の一つとして始まった文化です。今回は、バトル実施が初めてということもあり、混乱する場面があったものの、出演者の皆様のおかげで第1回「DANDANDANCEバトル」を成功させることができました。バトルの場では大学生が先頭に立ち、バトル経験のない参加者をサポートしながら、舞台に上がった全参加者が舞台中央で得意とする技を披露し、客席をわかせていました。この時、私は、バトル参加者と観客の心が一つになっていると感じました。

さらに、私は、今年度DANDANDANCE実行委員がフィナーレを飾るダンスの振り付けも行いました。全員がダンス未経験者であるからこそ、このフィナーレの作品を通して何か感じてほしいという願いがありました。人前に立つことの楽しさ、スポットライトや歓声を浴びる気持ちよさ、なにかを成し遂げるまでの過程、自分たちだけでなく観客席にも感動を与える喜び、苦手が大好きに変わる瞬間…。そんな小さな“何か”が変われば人は成長したと言えるのだと思います。

実行委員の仲間たちは、事前の準備や当日の運営、フィナーレのダンスを通じて、一人一人が、感じてほしいという願いを遥かに超え、沢山のことを吸収し、学び、感じ取ってくれました。

加えて、彼らは「無駄な努力はない」ことを証明し、大きな夢と希望を与えてくれました。実行委員のみんなに感謝の気持ちでいっぱいです。心から「ありがとう」と伝えたい、そんな公演となりました。

踊り手だけでなく観客をも巻き込み、「会場一丸となった雰囲気をつくり上げたい!」という願いは、あの瞬間、あの舞台で、強く感じることができました。

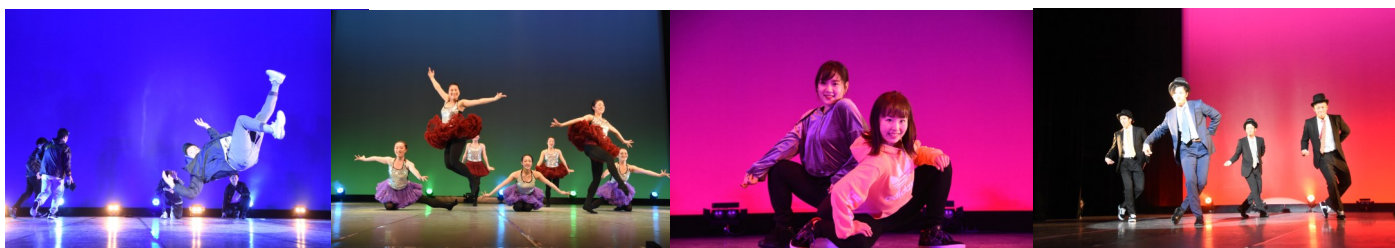
来年は第15回目となる節目の年です。DANDANDANCE&SPORTS 15thも沢山の方々のお力を借り、今年以上の盛り上がりになるよう願っています。

最後になりましたが、私の考えや、叶えたいこと、やりたいこと、譲れないこと、そんなすべてを許してくださった山梨雅枝先生、河野未来先生、陰で支えてくださった諸先生方、仙台大学の職員の皆様、舞台監督工房の皆様、実行委員のみんな、本当にありがとうございました。

私は、今回の公演で「ダンスは、人を変えることができる、強くすることができる」と実感致しました。

さあ！みなさんも一緒に踊ってみませんか？

（報告：DANDANDANCE&SPORTS14th実行委員長 健康福祉学科 4年 菊地 遥）



平成29年度学生相談室・教育改善企画運営委員会共催 教職員研修会 「障害学生への合理的配慮—山形大学における取り組みの実例—」を開催

1月26日（金）にA棟大会議室にて、平成29年度学生相談室・教育改善企画運営委員会合同開催の教職員研修会を開催いたしました。講師として山形大学障がい学生支援センターの有海順子先生をお招きし、教職員と教職を目指す学生約80名が参加しました。

有海先生は聴覚障害学生への支援を中心に、障害学生支援に関する教育・研究を行っており、障害学生支援や障害学生支援技術養成講座の実施などにも取り組んでいらっしゃいます。

障害学生支援については平成28年4月に障害者差別解消法が施行され、国公立大学では障害者への「合理的配慮の提供」が法定義務となり、対応がなされています。私立大学でも同等の対応が求められており、本学においても教育機関としてそのような求めに適切に対応していくため、法令や合理的配慮、実際の支援について正しく理解しておく必要があると考え、今回の研修会を企画いたしました。今回は有海先生より、「合理的配慮」の解説から実際の支援など、山形大学での実践例を交えてご講演いただきました。

有海先生によれば「大学が提供すべき合理的配慮」とは、修学上の困難に繋がるような社会的障壁の除去であり、障害学生が障害の無い学生と同じように教育を受けられるよう、障壁となっている事柄や従来の方法などを個々の障害特性や困りごとに合わせて変更・調整することで、それは障害学生を「特別扱いする」ということではなく、障害学生が他の学生と同じ学びのスタートラインに立つためのものだったということです。何が合理的に配慮に当たるかは個々のケースによって異なるので、実際の支援では障害学生との個別の建設的な対話が重要になってくるとのお話でした。

山形大学では平成27年4月に障がい学生支援センターが設立され、障害学生への支援や教職員へのバックアップを行っているそうです。本学ではすでに聴覚障害のサポートを学生支援センターで行っていますが、本研修会では具体的な聴覚障害と発達障害の学生の例を挙げて支援についてご紹介いただきました。

聴覚障害学生は受け取ることが出来る情報が限定的になってしまい、情報のやり取りやプロセスにアクセスすることが困難で、聞こえる学生とのコミュニケーションが難しくなってしまうことも少なくないそうです。それでも情報がきちんと伝われば、聴覚障害があってもできることは増えるので、目に見えない音声情報を目に見える視覚情報に変えて伝えるなど、情報保障支援が必要とのことでした。

また発達障害の学生については、外見から判断されにくいいため誤解されることが多く、支援よりも批判、叱責を受けることが多いと言います。大学生活の中では、自分で履修計画を立てなくてはならないことや、教室や座席が固定でないこと、多様な授業形態、ホームルームが無いことは発達障害の学生にとって社会的障壁になります。発達障害の特性は変えられないので、二次障害を防ぐためにも周囲の理解や特性に応じた対応、本人の工夫が必要になってくるとのことでした。

大学での合理的配慮を考える際のポイントは、学生が習得すべきものである「教育の本質」を変えることなく、社会的障壁になりうるような「習得するための手段」や「評価の方法」を、可能な範囲で変更していくことだといえます。また、障害学生のための環境整備や教育的対応・指導の充実は、すべての学生にとって学びやすい大学となることに繋がっているとのことのお話もありました。障害学生について考え対応していくことは、全ての学生にとって有益なのだと感じた研修会でした。

（報告：学生相談室）



研修会の様子

今年度2回目の仙台大学Presents 仙台89ERSホームゲームを開催

1月28日（日）、今年度第2回目となる「仙台大学 Presents 仙台89ERSホームゲーム」仙台89ERS vs 秋田ノーザンハピネッツの試合がカメイアリーナ（仙台市体育館）を会場に開催されました。

当日は本学の冠ゲームということもあり、試合は、昨年12月の全国高校バスケットボール選手権大会（ウインターカップ）で2年ぶり5度目の優勝を果たした明成高校男子バスケットボール部の相原アレクサンダー学選手と八村阿蓮選手によるTip Offセレモニーによってスタートしました。オフィシャルタイムアウトの中では、仙台89ERSチアの鈴木保之香さん（平成23年体育学科卒）と体育学科2年の羽川佳苗さんが、健康福祉学科の紹介を中心に、本学についてPRしてくれました。また、ハーフタイムには12月の冠ゲームに引き続き、新体操競技部による美しい演技で観客を魅了しました。さらに、会場内に設置されたブースでは、健康福祉学科の学生15名による本学PRブースも設置され、ハンドマッサージで来客を癒していました。

試合は仙台89ERSが惜しくも敗れはしたものの、勝利に向かって攻め続ける姿勢に会場は終始盛り上がりを見せていました。なお、明成高校出身の石川海斗選手には試合後、本学が様々な健康効果に関する実証研究を行っているアイリスオーヤマ社製の「体幹ストレッチコアトレーナー」がプレゼントされました。今後も仙台89ERSとの連携をさらに深め、スポーツ栄養やスポーツ情報分析、スポーツコーチングなど多岐にわたる分野で、プロの現場での実践的な学習や人材育成、チームや選手の補助の機会を提供して参ります。



試合終了後の記念写真



吉田洋志新助手がハンドボールアジア選手権に情報分析スタッフとして帯同

1月18日から28日の期間、韓国の水原市で開催された第18回ハンドボールアジア選手権に、日本代表分析スタッフとして帯同しました。結果は6位（14カ国中）に終わり、1～4位までに与えられる世界選手権の切符を獲得することが出来ませんでした。

私自身、今大会において学んだことは、選手に対しての情報の伝え方です。選手がどのような情報を求めているのかを、会話などの中から聞き取り、それに基づいて効率よく作業を行い、瞬時にフィードバックをしていく必要があるということを再認識しました。このことは、競技レベルを問わず必要なことだと思うので、まずは本学女子ハンドボール部において同様の取り組みを行うほか、アナリストを目指している学生に、この経験を伝えていきたいと思っています。

今回のアジア選手権は、オリンピックの前の年に行われる世界選手権の出場権を逃す結果となり、2020東京オリンピックに向けた代表強化に大きな痛手となりました。日本代表は、この結果を真摯に受け止め、成果と課題を洗い出し、オリンピック開催国として出場権を与えられているメリットを活かしながら、引き続き強化活動を行っていくことになります。私自身もさらなる研鑽を積み、東京オリンピックに向けた代表強化に携わるスタッフとして活動を継続していきたいと思っています。（報告：新助手 吉田 洋志）



情報分析スタッフとして帯同した吉田新助手

南條充寿教授が柔道ハンガリー代表チームチーフディレクターに就任

2020年に開催される東京オリンピックに向け、本学の南條充寿教授とご夫人の和恵柔道部女子監督が、ハンガリー共和国の柔道ナショナルチームをサポートしていくことが決定したことに伴い、「第32回オリンピック競技会（2020/東京）に向けた仙台大学によるハンガリー柔道連盟へのサポート体制に関する協定書」の調印式と記者会見が1月24日（水）に仙台市内のホテルを会場に行われました。

調印式に際し、公益財団法人全日本柔道連盟会長の山下泰裕氏より「柔道の創始者である嘉納治五郎師範は人づくり・人間教育とともに柔道を通じた国際交流に注力されていた。南條教授は今後、日本とハンガリーの懸け橋となるような人材育成に尽力して欲しい」と心あたたまるお祝いメッセージ及び大変立派なお花を頂戴しました。

記者会見で南條教授は「東京オリンピックに向けて、日本人選手のような粘りのある選手を育てたい。ハンガリー柔道協会が掲げるメダル獲得という目標の達成のために協力していきたい」と語りました。

その後、ハンガリーオリンピック委員長であるクルチャール・クリスティアン氏とハンガリー柔道連盟会長であるトート・ラスロー氏は、本学の開学50周年記念式典・祝賀会に参加、出席者約250名と共に歓談しながら和やかなひと時を過ごされました。

トート氏は「南條教授ご夫妻のような素晴らしい指導者にハンガリー柔道チームをサポートいただくことに対し、ご了解くださった仙台大学の朴澤理事長・学事顧問をはじめ阿部学長、みなさんに心からお礼申し上げる。この調印式が仙台大学の節目となる開学50周年という記念すべき式典の日に重なり、このように私達が参加させていただけた事は大変名誉であり、日本語的に言う「ご縁」を深く感じる」と述べました。

南條教授は2020年12月末までの間、仙台大学における通常業務をこなしながらハンガリー柔道チームが来日した際などに受け入れ・指導することとなります。



記者会見後の記念撮影

「春季海外留学・研修結団式、危機管理研修会」 「夏季海外留学・研修報告会」を開催

1月30日（火）に「平成29年度春季海外留学・研修、危機管理研修会、平成29年度夏季海外留学・研修報告会」を開催しました。今回の春季海外留学・研修には、8つプログラム（韓国・龍仁大学校/中国・瀋陽師範大学/台湾・台東大学/アメリカ・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校/アメリカ・ハワイ大学/デンマーク・ノアフュンス国民大学、リレベルト大学/フィンランド・カヤーニ応用科学大学/ニュージーランド・カンタベリー大学、CCEL）に35名の学生を派遣します。各プログラム毎に参加する学生の代表から力強い決意表明がありました。また、夏季海外留学・研修（ベトナム・ハノイ大学/アメリカ・ハワイ大学/フィンランド・カヤーニ応用科学大学）に派遣された学生から、プログラム内容や研修成果について報告がありました。

（報告：国際交流センター）



研修報告会の様子

スポーツマネジメント・コース卒業論文全体発表会を開催

1月29日（月）、体育学部体育学科スポーツマネジメント・コースの平成29年度卒業論文全体発表会が開催されました。この会は、年に1度、コース所属学生全員（2～4年生）とコース関係教員が一堂に会し、各ゼミの4年生代表者による卒業論文発表を聞く内容となっています。今年は、各ゼミから選出された6名の学生が発表を行いました。なお、今年はコース関係者だけでなく、興味を持っていただいた方にも数名ご参加いただきました。

2年生にとっては、初めて卒業論文とはどのようなものか理解するきっかけとなります。また、3年生にとっては、すでに所属ゼミが決まっており、各自の研究計画を進めている段階にあるため、1年後に目指すべきレベルを再確認できる場となります。そして、4年生にとっては、本コースに所属した成果の確認、また、大学で4年間学んだ集大成を披露することに繋がります。

代表学生は、7分間の発表を行った後、3分間の質疑応答にも応じていました。質問は教員からのみでなく、学生からもあり、限られた時間の中でも活発な議論がなされました。発表内容は、キャンプ場面におけること、震災復興に関連した内容、スポーツとまちづくりやスポーツボランティアに関すること、Instagramに着目した内容、そしてプロレス観戦者を対象に研究したものと、多岐に渡っていました。年々卒業論文のレベルは向上しており、社会的意義が高いものや大学院レベルに匹敵するものも出てきています。

この会を通じて、卒業論文の質を高めていくだけでなく、所属学生の意識を高めたり、将来へのヒントを得たり、各自が多く刺激を受けられる場になればと思います。今回で4年生にとっては一区切りとなりますが、コースとしては今後もこの全体発表会の開催を継続し、より充実した教育を提供できるよう努めていきます。来年度も同時期に開催を予定していますので、コース所属に関わらず、皆様のご参加をお待ちしております。

（報告：体育学科スポーツマネジメント・コース）



（上）研究内容を発表する学生
（下）発表に耳を傾ける学生

「地域とスポーツ～そして、2020に向けて」と題し阿部学長が講演

1月20日（土）に、阿部芳吉学長が「地域とスポーツ～そして、2020に向けて」との演題にて講演を行いました。

この講演は、「スポーツコミッションせんだい」が主催し、仙台大学と「市民スポーツボランティアSV2004」が協力、「スポーツまちづくりトーク」として太白区中央市民センターで開催されました。阿部学長からは、自身の気仙沼市大島中学校から始まった教員経験で培った人づくりの苦労と体験を中心としたお話がありました。

その感動的なお話の内容に加えてウィットとユーモアに富んだ巧みな話術で、会場に詰め掛けた80名余りの聴衆からは常に笑いと大きな拍手が起こり、大盛況のうちに1時間半の講演時間が終了いたしました。

（報告：准教授 池田 敦司）



講演会の様子